

102 誌上发表 戦時下の臨時付属医学専門部について

1. 総力戦体制下の医学教育

根本 良介

鳥取県立中央病院 健診室

臨時付属医学専門部（以下、医専）は、昭和12年の日支事変勃発からの戦局拡大に伴う医師不足を解消する目的で作られた。医師不足の要因については、医師が陸海軍に召集・徴用されて、働き盛りの若い医師の不足が急速に広がり国民医療に支障をきたしていることや、戦闘地での現地住民への医療対策や感染症対策への需要増が挙げられた。当局の構想としては、年間医師養成数3千人を5、6年のうちに倍増する計画であった。昭和14年5月、医専の設置が勅令として公布され、7帝大を含む13の官立大学医学部に併設された。昭和19年には「臨時」の二文字省かれて附属医学専門部となり、昭和27年3月の卒業生を最後に廃止された。今回は、7帝大の医専を中心に、設置から廃止にいたるまでの経緯や入学、講義、卒業生の進路など、当時の官報、文献、各大学の資料から調べた結果を報告する。

昭和14年5月31日、7帝大の医専3,146名の志願者に全国一斉の入学試験（数学、国語、英語、化学、身体検査、人物考査）が行われ、482名が合格し、競争率は6.5倍であった。当時統治していた台湾からも236名が受験し、24名が合格、競争率は9.8倍であった。医専への志願者が盛況であったのに比し、同じ年の帝大医学部の一次試験では、東京大学に247名、京都大学に200名の志願者があったが、他大学は軒並みに定員ギリギリの志願者で、東北大学では100名の募集に22名の欠員であった。この原因としては、医学部進学資格者たる高校理系卒業生の絶対数不足、および軍需工業の発展に伴う工業技術者の養成が著しく高まり、在学が1年長い医学部が敬遠されたことによるとされた。

勅令を受けて作成された医専学則（カッコ内は従来の医学部規定）によると、入学資格は中学卒業（高等学校卒業）、授業料は80円（120円）で本体の医学部との相違が歴然であった。修業年限は4年であったが、太平洋戦争の開戦にともない3年半となった。なお、受験料は5円、入学金は3円であった。北海道大学の資料によると、1期生から4期生の入学者316名の中に陸軍省、海軍省、大東亜省、厚生省、鉄道省などから委託を受けた給費生が59名入学し、30-40円の給付を受けていた。医専職員の受け入れ体制は精彩を欠き、東北大学では教授5人、助教授3人、助手7人、書記2人の定員で維持し、授業のほとんどを委託講師として医学部に依頼した。

東北大学の資料で、医専（カッコ内は同年の医学部）第一期生の出身地を調べると、東北地方出身者38名（45）、東北地方以外31名（28）、台湾出身者5名（0）で顕著な地域性はなかったが、台湾からの入学者が特徴的であった。当初の4年間の医専卒業生260名のうち台湾出身者は22名含まれていたが、従来の医学部卒業生317名の中には台湾出身者は含まれてはいなかった。北海道大学では、1期生65名のうち道内出身者は55名の92%で、当時の北海道大学医学部の道内出身者が30-40%であったことを考えると、北海道における医専設立は、地域に密着した医師養成機関の性格もあったと考えられる。

戦時下の臨時付属医学専門部設置は総力戦体制下の医学教育を象徴するもので、その後の医育制度に大きな影響を及ぼしたと考えられ、残存する資料を整理して報告した。